

経営(継承)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方④ ちていでんりょう 馳騁駉獵

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に「早川浩士の常在学場」(筒井書房)、「介護人財創造塾」(筒井書房)、「介護保険改正に勝つ!経営」(年友企画)、「データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

「難得之貨 令人行妨」 えがたきのかは ひろおこなきをたけむ

「老子・第12章」には、「馳騁駉獵は人の心をして狂を發せしむ。得難きの貨は、人の行いをして妨げしむ」とある。

馳騁は、馬を走らせること。駉獵は、狩をすること。

馬を走らせ狩に夢中となつてしまった馬上の人は、いつしか狂を發したようになって(精神に異常を來したような発狂の状態)、平常心を失つてしまふ。

経営も然り。

業績が悪化すれば、見たくもない赤字が帳簿を飾ることもある。好業績となれば、キャッシュフローが踊り出す。お金を追いかけているわけではないのだが、常に売り上げと支払い金額が頭の中を駆けめぐっている。

トップの仕事は「資金繰りに長けることである」と鼻持ちならぬ高言をする人もいる。だが、その一部始終を、部下に見られていることに気がつかない。

情意(感情と意志)の制し難いことを馬に譬えた、心の駒(馬)がある。

平常心を欠くのは、我利(自分

だけの利益)や我見(自分だけの偏った狭い見地・意見)がその人の心に飛び込んで、馳騁駉獵と化している状態といつてよい。

介護報酬を代理受領しているという立場を再認識するため、あえて毎月の給与明細を利用者から受け取り続けることを信条としているトップがいる。

心の駒に手綱を締めるという自らの心がけに資質の鍛え方のよき手本のひとつと同感した。

「理も法も立たぬ世ぞとて引安き心の駒の行くに任かすな」

心の駒を詠んだ「島津いろは歌*」の一首である。

道理も法も通らない。自分にとって都合の良い行いや考えばかりがまかり通って、社会のルールやマナーさえも守れない世の中である。

「しかたがない」「しょうがない」

などと嘆いて、自らも心の許すままに安易なほうへと傾き、わがまま勝手に過ごしてはいけない。投げやりになってはいけない。ましてや、自暴自棄となつて勝手放題をするようであつてはなら

ない。

あるべき姿を自学自修せよ。それが自分一人であつたとしても、正しき道を開拓・啓くために心を奮い起こし、正義と人の道を買くことである。

すべては、心の駒の手綱さばきにあるとはいへ、勝手な行動や気の緩みを自ら戒めることが鍛えられていない心が暴走する馬が走り回り、騒ぎ立てる猿が暴れて手に負えない意馬心猿のようになつてしまふ人がいる。

「心の駒に手綱を許すな」という箴言を心骨に刻すとよい。

過ちを繰り返さないよう、油断なく心を引き締めよということ。

また、「老いたる馬は道を忘れず」という老馬之智もある。道に迷つた時、老馬の知恵を利用したところ、無事に帰ることができたという中国の故事だ。

経験を積んだ人は、確かな知恵を蓄えているので誤ることがないという意味がある。

スタッフの人材育成を真に願うなら、自らの心が育つていく姿を示していくことである。介護保険施行から丸10年。心の大掃除を忘れずに。

*本誌2008年6月号本欄参照